



Data

監督・脚本: 毕赣 (ビー・ガン)

出演: チェン・ヨンゾン/ツァオ・ダクイン/ルオ・フェイヤン / シエ・リクサン/ルナ・クオック/ゼン・シュアイ/クイン・グァンクイアン/ユ・シシュ/グウオ・ユエ/リュ・リンヤン/ヤン・ツォフア

👁️👁️ みどころ

日本初公開となるビー・ガン監督の『ロングデイズ・ジャーニー この夜の涙へ』(18年)に先立って、試写室で本作を鑑賞。『キネマ旬報』の特集を読んだだけでも、抽象画のような本作は難解そう。しかし、『象は静かに座っている』(18年)のフー・ポー監督と対比するためにも、本作は必見だ。

製作費35万円からスタートした本作の撮影風景は如何に?そして、本作のテーマとなる「夢と記憶と時間」を如何に描くの?また、詩人でもある彼が繰り出す難解な詩の数々は?

そう身構えたが、疾走するバイクやトラックの中で展開していく旅の物語(?)は意外にわかりやすい。タイトルの意味を考えながら、ビー・ガン監督ワールドをじっくり噛みしめたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■この邦題は?原題は?「ブルース」とは?■□■

「ご当地ソングの女王」と呼ばれている水森かおりの「ご当地ソング」の代表曲は「鳥取砂丘」。他方、中国第五世代を代表する賈樟柯(ジャ・ジャンクー)監督の出身地は山西省の地方都市・大同(ダートン)。彼はその大同やその近くの汾陽を舞台にした映画『青の稲妻』(02年)、『シネマ5』343頁、『一瞬の夢』(97年)、『シネマ34』256頁、『プラットホーム』(00年)、『シネマ34』260頁)等から出発し世界に飛躍していった。しかし、本作の原題『路辺野餐』とはナニ?中国語を勉強している私には、「路辺」は道端、「野餐」はピクニックの食事や野外で食事することであることがわかるので、そこから何となく本作のイメージを構築することができる。

しかし、『凱里ブルース』ってナニ？「ブルース」は、米国西南部でアフリカ系アメリカ人の間から発生した音楽の一種およびその楽式のことで、日本人にはよくわかる言葉。青江三奈が歌った「恍惚のブルース」（66年）や鶴田浩二が歌った「赤と青のブルース」（55年）等とはとりわけ有名だ。他方、「凱里（カイリ）」は本作で鮮烈なデビューを飾った中国人監督ビー・ガンの出身地だが、それは広い中国大陸のどこにあるの？

■凱里は中国のどの州に？そこはどんな町？鎮遠は？■

今や、湖北省の武漢は“新型コロナウイルスを生んだ町”として世界的に有名になった。また、湖北省も多くの患者の発生で有名になった。しかし、貴州省は名前こそ立派だが、私を含めて多くの日本人はその存在すら知らない辺鄙な中国の省だ。直轄市の1つである重慶市や、成都で有名な四川省の南に位置する貴州省は、ミャオ族、プイ族、トン族、スイ族、イ族など少数民族が多く暮らしており、少数民族の故郷と呼ばれている州。その平均気温は、冬の12月～2月こそ7～9度だが、春の3月、4月、秋の10月、11月は13～18度、そして夏の5月～9月は21～26度と暖かい。また、もし、あなたが「夜郎国」の寓話を知っているなら、春秋戦国時代（紀元前8世紀～紀元前3世紀）に、夜郎国などの独立国が貴州省にあり、北からの侵攻に対抗したことも知っているはずだ。

貴州省の州都は貴陽だが、凱里市は黔东南ミャオ族トン族自治州の州都。ただし、州都とは言っても、人口はわずか46万人だ。ガイドブックを読むと、凱里市内の見どころは州民族博物館くらいで、観光のメインは州内に点在する少数民族の村らしい。また、「自治州内は山道が多いため、距離のわりに時間がかかるので注意」と書かれている。スクリーン上では、その山道をバイクやトラックで疾走する（？）シークエンスが度々登場するので、それに注目！本作のパンフレットにある「シノプシス」では「エキゾチックな亜熱帯、貴州省の霧と湿気に包まれた凱里市」と紹介されているので、本作では、まずスクリーン上からそんな凱里の町そのものを実感したい。他方、本作に登場するもう1つの町が鎮遠だが、鎮遠の名前は日清戦争時代に清国が世界に誇った戦艦・定遠の姉妹艦・鎮遠として有名。しかし、「シノプシス」には「そして辿り着いたのは、ダンマイという名の、過去と記憶と現実と夢が混在する、不思議な街だった——。」と書かれている。こりゃ一体なぜ？

■ビー・ガンは監督兼詩人！冒頭の詩は？テーマは？■

ビー・ガンは1989年生まれの若手注目監督。彼は、手持ちの2万元（約35万円）で本作の撮影に着手し、その後1000万元（約1600万円）を借金して本作を完成させたそう。そんな本作は、あれよあれよという間に有名になり、新華社通信は、「過去5年で一番優れた中国国産映画」「中国映画を50年進歩させる」と絶賛したそう。ちなみに、私はビー・ガン監督の日本デビュー作となる長編第2作『ロングデイズ・ジャーニー この夜の涯てへ』（18年）を本作に続いて観賞する予定だが、その公開に合わせるかのよ

うに、『キネマ旬報』3月上旬号は「中国映画が、とんでもない!」の特集を組み、その第1章ではビー・ガン監督を8～14頁にわたって解説・絶賛しているので、これは必読!

そんなビー・ガンは、映画監督であると同時に詩人らしい。そのため、本作冒頭では彼が2013年に監督した22分の短編『金剛経』のテーマである「金剛般若経」の教えがスクリーン上に映し出される。それは、「人は過去の思いを留め置くことはできない。現在の思いを持ち続けることも、将来の思いを掴むこともできない。」というものだが、正直言ってこれは、私にはチンプンカンプン。ジャン＝リュック・ゴダール監督の『さらば、愛の言葉よ』(14年)(『シネマ35』未掲載)は絶賛されていたが、私にはあまりにも抽象的かつ難解で、全く好きになれなかったが、本作もどちらかというとそのタイプ?さらに、ビー・ガン監督は本作を「夢、記憶、時間」の3つをテーマとして演出しているため、「旅」を軸とした本作のストーリーの中で描かれる夢、記憶、時間の演出は極めて難解だ。

しかして、本作のテーマは?ビー・ガン監督は海外サイトのインタビューで、「自分の映画は夢と記憶と時間についてのみ描いている」と語っているが、その3つの要素のうち「記憶」の部分が彼が今も生活している凱里の土地に深く結びついているのは当然。そのため、本作冒頭の舞台は、当然その凱里となる。そして本作は、エキゾチックな亜熱帯、貴州省の霧と湿気に包まれた凱里市の小さな診療所に身を置き、老齢の女医と幽霊のように暮らすチェン・シェン(チェン・ヨンゾン)が登場するところから物語(?)がスタートしていく。しかし、こりゃ、見るのにえらくしんどそう。本作については、導入部からそう覚悟を決めて鑑賞することに。

■□■ストーリー前半は?俳優は?なぜチェンは旅に?■□■

「記憶」は人それぞれが持っている特有のものだから、他人のそれをスクリーン上に断片的に映し出されても、それが何の意味を持つのか容易にわかるものではない。ちなみに、本作のパンフレットの「シノプシス」では、本作前半を次のとおり紹介している。

チェンが刑期を終えてこの地に帰還したときには、彼の帰りを待っていたはずの妻はこの世になく、亡き母のイメージ(水中に落ちていく靴)とともに、チェンの心に影を落としていた。さらにしばらくして、可愛がっていた甥も弟の策略でどこかへと連れ去られてしまった。チェンは甥を連れ戻す為、また女医のかつての恋人に思い出の品を届ける為、旅に出る。

しかし、「金剛般若経」の提示に続いてスクリーン上に映し出される、導入部の展開を見ても、それがシノプシス紹介どおりのものであると理解するのは容易ではない。なお、そこに登場する主人公チェンを演じるチェン・ヨンゾンは、ビー・ガン監督の実の叔父さんで、その経歴は反社会的な組織に身を置き、投獄されていた時期もあったそうだ。ずぶの素人ながらビー・ガン監督によって本作の主演チェン役に抜擢された彼は、「ビー・ガンは、私の過去、現在、未来をつなぐ機会を、彼の作品の中で与えてくれた。私は幾度も、チェン・シェンが私なのか、私がチェン・シェンなのか分からなくなってしまったほどです。」

と語っているから、本作におけるそんなチェン・ヨンゾンの熱演をじっくり観察したい。

他方、チェンと対立していた弟（シエ・リクサン）の策略でどこかに連れ去られてしまったという甥のウェイウェイの若き日を演じるユ・シシュは、プロの俳優だ。上記の通り、チェンが凱里を離れて旅に出たのは、甥の幼いウェイウェイ（ルオ・フェイヤン）を連れ戻すためだが、この2人はいつどこで出会うことができるの？そしてまた、女医（ジャオ・ダクイン）のかつての恋人に思い出の品を届けるためだが、それは実現できるの？

■□■本作後半のストーリーは？ダンマイという街は？■□■

「シノプシス」では、本作後半のストーリーを次のとおり紹介している。すなわち、

そして辿り着いたのは、ダンマイという名の、過去の記憶と現実と夢が混在する、不思議な街だった——。この世界が私たちの記憶の産物なのか、それとも単にこの世界の空想に過ぎないのかを見分けるのは容易ではない・・・

しかして、前半から後半に移行するスクリーン上では、バイクに跨がって旅を続けるチェンの姿が映し出される。しかし、これは『大脱走』（63年）で観たスティーブ・マックイーン扮する兵士がバイクを爆走させるシーンとは全然違って、のんびりしたもの。また、チェンが辿り着いたダンマイという街は、「過去の記憶と現実と夢が混在する、不思議な街」だから、青年時代のウェイウェイがなぜそこにいるのか、私にはサッパリわからない。だって、ダンマイという名の街が、「私たちの記憶の産物なのか、それとも単にこの世界の空想に過ぎないのか」自体がわからないのだから・・・。

他方、本作後半、すなわちチェンが辿り着いたダンマイの街では、ヤンヤン（ルナ・クオック）という黄色いスカートがよく似合う美女が登場するので、それに注目！若き日のウェイウェイもヤンヤンも凱里の観光ガイドを目指していたそうだから、「凱里は台江の東に位置し・・・」と丸暗記した教科書を何度も読み上げるシークエンスが面白い。もっとも、それは私たち観客にはありがたいが、凱里からダンマイにやってきている男チェンには、そのガイドは不要なのでは・・・？それはその通りだが、当日ダンマイの街で開催されるあるイベント（？）については、ヤンヤンの案内があれば便利だし、ヤンヤン自身が友人の女の子と一緒にそこに行くようだから、必然的にチェンも同行することに。ちなみに、ウェイウェイはしつこくヤンヤンにつきまとっていたが、どうもヤンヤンのウェイウェイに対する関心は高くないようだ。

本作後半はそんなストーリーが展開していくが、そもそもダンマイという街でチェンが取っている行動は現実？それとも、織田信長が死ぬ直前に言ったように、夢？まぼろし？さあ、あなたはこんな映画をどう考える？私は基本的にこの手の摩訶不思議な抽象的な映画は苦手だが、本作についてはチェン役を演じるチェン・ヨンゾンの演技力と「2016年版のアンナ・カリーナ」と呼ばれているらしい女優・ルナ・クオックの魅力のおかげで、眠り込まなかった自分を少し誉めてやりたい。 2020（令和2）年3月17日記